(3)　千葉県バドミントン協会加盟団体

1．千葉県家庭婦人バドミントン連盟
2．千葉県教職員バドミントン連盟
3．千葉県実業団バドミントン連盟
4．千葉県郡市バドミントン連盟
5．千葉県小学生バドミントン連盟
6．千葉県中体盟バドミントン専門部
7．千葉県高体盟バドミントン専門部
8．千葉県学生バドミントン連盟

25　千葉県サッカー協会

①　沿　　革

(1)　揺　籃　期（昭和３～20年）

千葉県におけるサッカーの歴史は、比較的新しいと言える。普及度も低くごく少数の学校で行われていたにすぎない。公式のサッカー場もなく、一般人は、ア式蹴球と言っても理解できなかった時代である。

昭和８年には、すでに体育協会の加盟団体として関東蹴球協会千葉支部があり、学校におけるサッカーチームとして組織づけられていたのは、千葉医大、千葉師範、東葛中、佐倉中、明倫中のチームであった。中でも千葉医大サッカー部の設立は最も古く、昭和３年に設立され、千葉師範サッカー部は、昭和６年に設立された。ただ、試合は、各学校の練習試合にとどまり、正式ゲームといえば、他県チームとの対抗戦のみであった。

しかし、だんだん優れた技術をもった選手も輩出するようになり、その時代をリードした名選手として、７年から10年には、御園生雄三、飯合大助、11年から15年には、角田富雄、吉岡越治、越川重、16年から20年には、石井清、植草健二等の名が挙げられる。

ところが、これらのチームも個人も、太平洋戦争の激化に伴ない、ボール、スパイクにこと欠くようになり、また欧米スポーツに対する白眼視化の世相とあいまって、ほとんどその活動は低滞し、わずかに千葉医大、千葉師範に余命が保たれていたのである。

〔注〕 昭和15年に東京オリンピックが開催される予定で、千葉大学医学部のサッカー場が練習会場として作られたのである。

(2)　黎　明　期（昭和21～30年）

戦後、いち早く復興したのは、千葉医大、千葉師範サッカー部である。

千葉医大は、大学リーグに参加し、東大、早大、慶大と並び１部で活躍した。当時のメンバーの中で、安保隆文、戸沢澄は、東西学生対抗に選抜され、最高水準の技倆を発揮した。

千葉師範も、高専リーグに参加し、１部で活躍した。当時のメンバーの中で、特に高橋荘介は、サッカー協会設立と普及に努力し、近隣の高校への指導等大いに活躍した。

このような雰囲期のうち、千葉県蹴球協会は設立された。昭和21年５月のことである。会長は、千葉医大教授の岩津俊衛、理事長は、検見川病院の吉川越治であった。

その頃、昭和21年、千葉商高の石川宏は、東葛飾高の大沢貞雄、千葉一高の鏡淵正義等の協力を得て、親善の蹴球大会を開催した。参加は、千葉師範予科と千葉中、千葉商、千葉工、東葛中、長生中の数チームであった。

昭和23年４月、県高体連の発足と同時に、石川は、蹴球専門部委員長となったが、６月、東京から篠崎兵衛が千葉一高に帰り、石川よりバトンを引継ぎ委員長となり、指導、普及に努め、チームのレベルアップに大いに貢献した。

一方、学制改革により、現在の制度としての中学校の発足は、昭和22年４月で、その年高橋荘介が市川一中に奉職し、サッカー部を設立した。田中彰が緑町中に奉職したのは、25年４月で、この年の11月に、第１回中学校サッカー選手権大会が開催された。参加は、市川一中、宮本中、習志野二中、椿森中、緑町中、佐原中、館山二中、東条中の８チームだった。

その頃、総合大学となった千葉大で活躍していたのが、鹿野房雄、佐藤時昭、松戸惇等で、加藤雅雄は、もう少し後になるが、これら各氏がその後の千葉県サッカーの発展に多大の貢献をしている。

このように、20年代半ばまでは、学校中心の行事だった。一般のチームは存在しなかったからである。そして、漸く27年、一般の選手権大会が開催された。参加チームは、定かでないが大学と学校OBの数チームだったと思われる。

ところで、国民体育大会は、昭和21年に第１回を開催し、以後、充実、発展して行くが、27年、第７回大会に、千葉一高が、南関東地区予選で神奈川勢を破って出場した。本協会として初の全国的大会への参加だった。その後、30年、第10回大会に長生一高が、関東地区予選を突破し、出場している。

また、昭和25年には、在日インドネシア、在葉朝鮮人、全千葉の交換試合を行っている。

全千葉のメンバーは、次のとおりである。

GK　岩動洋二RB　目良　弘LB　一井　正
RH　篠崎兵衛CH　戸沢　澄LH　加藤雅雄
RW　竹内　裕RI　安保隆文CF　永原謙治
LI　梶山　豊LW　高橋荘介

(3)　普　及　期（昭和31～40年）

昭和31年４月、畑山明が千葉一高に奉職した。初の関東大学サッカー１部リーグの経験者だった。当時の加盟チームは、高校が８チームで、一般や中学校も、20年代と同じ程度の数だった。

この年、順大に蹴球部が設立され、翌32年４月に、習志野高と市立船橋高が開校したが、今やサッカー界の名門校とうたわれるこれらのチームも、スタート当初は、茨の道を歩んでいた。

30年代前半を概活すると、一般の部では、選手権大会が、31年から春、秋と年２回の開催となったが、35年でさえ、春８、秋７チームの参加しかなかった。

中学校の部では、33年に、小中体連の中にサッカー専門部の設置が認められたが、初めはオープン種目であり、正式種目となったのは36年からである。この頃は、緑町中の天下で、27年の第３回大会から、36年の第12回大会まで、10連勝を成し遂げている。

一方、高校の部では、加盟チームの増加は、捗捗しくなく、35年でさえ11チームという状況だった。しかし、31年長生一、32年千葉商、35年長生一と国体出場を果たしている。でも、22年に再開された全国高校サッカー選手権大会には、代表となることはできなかった。また、33年から開催された関東大会では、代表チームはいずれも不振な成績だった。

30年代後半になると、色々な動きがあった。

その一つが、指導者についてである。37年４月に神明民雄、38年４月に青木克己、若菜征人らが高校に、長野靖が中学に奉職した。37年８月に西堂就が、千葉経済高から習志野高に転勤した。40年４月には、松本潔、大木葉俊泰、浅野興治らが中学に奉職した。いずれも、選手、指導者、審判として大きく貢献した。中でも、西堂、青木が、抜群の指導力を発揮し、本県サッカーのレベルアップに、どれだけ貢献したか測りしれないものがある。

もう一つは、競技力の向上についてである。

その象徴的な出来事は、37年12月、日立市の会瀬のグランドで行われた、全国高校選手権大会東関東大会だった。この大会は、千葉、茨城より２チームずつ参加するが、１日目が終わり、習志野高と千葉高が勝ち上った。どちらが勝っても千葉勢が、40年の厚い壁を破ることになる。そして、再試合にもつれこんだ対決は、習志野高の勝利となり、千葉県勢初の代表となった。習志野高には、穂高良治、山田博保、千葉高には、山田勢二等の好選手を擁していた。

また、習志野高は、39年の第７回関東高校選手権大会でも優勝し、過去６年間埼玉に独占されていた優勝旗は、初めて千葉が奪回したのである。そして、県の総合体育大会では、37年に優勝して以来、47年まで11連勝という習志野時代に突入することになった。そして、国民体育大会においても、37年から44年まで、８年間に７回出場している。42年だけ千葉高だった。

更に習志野高は、38年にも茨城を一蹴し、２回目の全国選手権大会出場を果たし、40年には、３回目の出場で、見事全国制覇を成し遂げた。主将は、本県で初の日本代表選手となった田辺暁男で、メンバー11名中８名が、緑町中、轟町中の出身者だった。このようにして習志野高は、関東、全国をもリードする名門校となっていった。千葉県の顔であった。

ところで、国民体育大会に教員の部ができたのは、昭和28年、第８回からであるが、本県は、一度も出場できなかった。教員チームは、関東予選の時だけ編成されたが、メンバーを揃えるのさえ容易でない状況だった。

また、一般のチームも、教員と同じように一回戦負けが続いていた。共に、関東では最低のレベルだった。県の代表チームは、34年の川鉄を除き、クラブチームが主体だった。そして、30年代後半からは、企業等の単独チームが力をつけ、40年は下総航空基地が代表となった。

〔注〕 35年の各都県のサッカー協会予算

千　葉	32,000円	群　馬	44,000円
栃　木	51,000円	神奈川	106,000円
埼　玉	160,000円	茨　城	477,000円
東　京	872,000円		

(1,000円未満４捨５入)

単純には比較できないが、千葉県のサッカーの普及度、レベルを表しているのではないだろうか。千葉県は、未だ「不毛の地」を脱していなかった。

〔注〕 33年に開催した東大ダックスチームとの親善試合における千葉県代表メンバー

GK　鳥海　公RB　加藤雅雄LB　田中　彰
RH　山崎惣吉CH　戸沢　澄LH　千葉三男
RW　岡久延男(篠崎兵衛)　RI　植草健二
CF　中村　勉LI　畑山　明LW　鹿野房雄

〔注〕 千葉県で開催した主な大会、会場

32年	国体関東地区大会	千葉高、千葉商
38年	第６回関東高校大会	千葉高、千大医
39年	全国高校選抜大会	千葉高

(4) 充　実　期（昭和41～50年）

昭和41年度、本協会は、会長に市原市長鈴木貞一、理事長に順大田中純二という新しい体制でスタートした。

この頃、高校では、習志野高が連勝中で、各大会の県代表の座を独占していた。41年から開会された全国高校総体の県代表も習志野高だった。この大会の県代表の座は、やがて、45年薬園台、47年茂原工業、48年千葉経済、50年八千代などと変化していった。

一方、一般の部では、40年度から社会人リーグを発足させたが、本格的な１、２部制となったのは、46年からだった。このような中、41、42年と国体県代表となったのが保証乳業で、東京農大出身の公文常夫、菊地功を中心に、県下最強を誇り、42年には、関東予選で勝ち、一般の部で、本県初の本大会出場を果たした。

また、千葉教員は、県リーグに参加できる程にメンバーも充実し、44年初の本大会出場を果たし、３位入賞した。続いて45年、第25回の大会で、念願の優勝を成し遂げた。主将青木の全盛時で、監督田中、コーチ佐藤、加藤の長年の苦労が漸く報われたのであった。メンバーには、蒲原敏行、若菜征人、山田博保、下原正規、金子正躬、谷川修三、大木葉俊泰、斉藤嵩、中村三男、浅野興治、西谷隆、寺井靖高、佐藤能成、松本潔、倉元顕、小幡貞司、平沢重樹、島本賢彦等が名を連ねている。

中学校では、緑町中の連勝が、37年轟町中によってストップした。38年は緑町中が勝ったが、以後は、39年松戸四中、40年習志野一中、41年千大付属中、42年茂原中、43年宮本中、44年湊中、45年船橋中、46年習志野台中、47年長生中、48、49年常盤平中、50年習志野四中と毎年のように優勝チームが代わっている。千葉市中心の勢力図が、県下全体に拡大していったのである。そして、全国中学生大会が45年から、関東中学生大会も同じ年度の46年３月から開催された。全国大会では、なかなか入賞できなかったが、関東大会では、第３回の大会で宮本中が優勝し、中学生のサッカー熱の上昇に拍車をかけた。

46年のビッグニュースは、全国高校選手権大会における習志野高校の２回目の優勝だった。エース大野正明中心のメンバーで、西堂監督の打ち建てた数多い記録の中でも、一際光り輝く大きな金字塔だった。そして、このチームは、翌47年、習友サッカー団として、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）及び中華人民共和国を訪問し、親善試合を行った。国交樹立のない国に対しての、一大難事業だった。

また、国体では、45年から、単独チームでなく、選抜チームを編成するようになり、県選抜は、毎年のように本大会へ出場したが、成績は芳しくなかった。

48年、県スポーツ界待望の若潮国体が開催された。サッカーは、市原市で開催されたが、八幡、五井、姉崎と並んだ芝のグランドは、過去に例を見ない豪華なものだった。鈴木市長を始め、課長加藤欣一、担当中川真を中心とした関係者の絶大な支援を受け、成功裡に終了した。

この大会、３種別に出場したが、共にベスト８どまり、全体で６位という成績だった。この時のメンバーに、高校では、木村雅之、教員では、優勝時のメンバーに、斉藤和夫、本田裕一郎、福永（橋本）広幸、西堂晴男、高梨（轟）孝夫、深倉和明らが加わり、一般では、穂高良治、酒井充、大泉一好、塙（中西）臣一などが名を連ねている。

その後、49年に坂本至、大越（鬼木）修司、鈴木隆太、50年に梶原由起夫などが加わり、指導者も充実してきた。藤原明夫、加藤将美、片岡道夫らは、高校生の頃だった。

昭和50年、本協会は、千葉県サッカー協会と改称し、それに伴い古い規約も改正した。そしてこの年、漸く少年団のチームが産声をあげることになった。

東京、メキシコ両オリンピックの後のサッカーブームは、小学生にも浸透していた。各学校単位や団地を中心としたクラブ組織が活動を始めており、地域毎に大会も開催されていた。しかし、それらは、協会としては組織化されていなかった。50年当時、県協会に所属していたのは、習志野市の袖ヶ浦毎日少年サッカースクールの１チームのみで、各地で活動している少年団チームを、県協会傘下に結集するため、第１回千葉県少年サッカー大会を発足させた。しかし、参加は、習志野、館山の２チームだけだった。この頃、スポーツ少年団の組織化に、中心的役割を果たしたのは、千葉市の浅野興治、松戸市の西谷隆、市川市の相馬清、松本潔等である。また、藤村忠夫、小久保元、児島憲一、稲田時男、今泉勇幸、秋田信也、花井進、沢田紀五、小河原和男、林田芳秋、畑山善文、竹内信

正、黒沢勝生等も、それぞれの地域で、少年団の育成に力を注いでいた。

(5) 発　展　期（昭和51～60年）

昭和51年、本協会は、創立30周年記念事業を行い、その一環として記念誌を発刊した。表紙は、加藤雅雄のデザインで、多くの関係者が執筆している。その中から、一つの埋草を紹介しておく。「雑感」と題して記載されている。

いい試合にはいいグランドがほしいですね。少年たちがのびのび育つためにもいいグランドがほしいですね。千葉県で、専用サッカー場は数えるほどしかありません。大観衆を入れて、ペレを招こうと思ったら……そんなグランドはないのです。野球場はあります。陸上競技場もあります。でもサッカーに使えないように工夫（？）してあります。サッカーを本当に理解してくれる政治家がほしいと思うのは一人私だけでしょうか。　　Ｍ．Ｋ

この記念事業の経費は、415万円だった。

この記念事業を契機として、52年度から、会長は、倉田寛之に交代した。

この10年間の特徴は、加盟チームの増加、ということにある。その推移を中心にみてみる。

１種は、50年は54チーム、61年には106チームと倍増している。それに伴いチーム力も向上し、古河千葉や千葉教員が関東社会人リーグに入り、順大も56年に関東大学リーグ１部昇格を決めている。県内では、自治体リーグも定着するようになった。

高校も、50年は80チーム、60年には162チームと倍増し、61年には170を超え、全国総体の代表枠が２となった。これは、公立高校の新設等が、50年５、以後、６、５、８、８、10、４、９、５、というように、10年間で60校も増えたことと、私立高校の新設によるもので、このことは、同時に指導者の増加につながり、底辺の拡大、レベルアップにつながっていった。そして、全国選手権大会の首都圏開催があり、本県も会場となったのは、57年からである。また、高校の試合を有料としたのもこの頃からである。高校の勢力図は、習志野中心から混戦模様となり、青木監督率いる八千代の時代へと変わっていった。特に、53年の八千代は、関塚隆、高田敏、を中心に、全国総体２位、全国選手権３位とオレンジ旋風を巻きおこし、全国トップレベルのチーム力を誇っていた。やがて、和久田充の八千代松陰が全国選手権大会への切符を獲得した。布啓一郎の市立船橋がこの大会に出場したのは60年のことだった。この大会に出場したのは、現在まで、習志野、八千代、八千代松陰、市立船橋の４校だけである。

そして、61年３月、高校選抜チームが初の外国遠征を行った。団長青木、以下、福永、和久田、池田、斉藤、本田、丸嶋、松田各先生が引率した。その後、薦田団長、以下13名のスタッフで、２回目の訪韓をしている。平成２年３月のことだった。

一方、中学校では、50年代初めの頃は、未だ普及の段階だったが、小学生のサッカー人口の激増に伴い、チーム数は、確実に増加していき、次に、技術の向上を図ることになった。それが、１年生大会、中学生トレセンの実施であり、招待サッカー大会も56年から実施するようになった。この県外チームとの対戦は、大きな刺激となり、県内チームのレベルアップに大きく貢献した。

少年も、関係者の努力で、51年の県大会には24チームが参加し、更に、52年に、日本スポーツ少年団の大会を発展させた、第１回全日本少年サッカー大会が開催されるに伴い、少年チームは、爆発的に増大することになった。この大会の予選には、52年が48チーム、58年には216チームが参加した。この間、56年には、児島監督率いる船橋FCが、初め全国優勝を飾っている。そして、59年からは、選抜チームが主体となり、

60年には、学校体育主体のチームから、クラブチームに主導権が移っていった。少年チームも、レベルアップが必要だったのである。

さて、51年６月、全国各地に先駆けて、習志野フラワーズという女子のチームが誕生した。当時、県内はもちろん関東地区にも本格的な女子チームはなく、少年チームや四十雀チームを試合相手として活動を開始した。しかし、女子のチームによる大会を開催するには、年月が必要だった。でも、54年に、第１回全日本女子サッカー選手権大会が開催され、東日本地区予選には、習志野フラワーズと習志野台中が参加した。以後、この予選にだけは参加したが、県内で女子の大会が開催できたのは、60年になってからで、春４チーム、秋６チームが参加した。この間、年度によっては登録するチームもでてくるが、継続可能なチームがなく、その時だけの登録に終わってしまった。

一方、この10年間、技術委員会、審判委員会共に、着実な活動を続け、選手強化は当然として、指導者や審判員の充実のため、様々な方策を講じ、その効果が次第に表れてきている。

(6) 飛　翔　期（昭和61～平成８年）

昭和61年、本協会は、40周年記念事業を開催し、この時も記念誌を作成した。表紙は、佐藤時昭のデザインで、これは、10年間のあゆみ、記録集的な内容であるが、この中で、当時の日本サッカーリーグ事務局長だった木之本興三が、「今後の日本サッカー界について」と題して提言している。その要旨は、プロ選手の登録が可能になった。サッカーの世界には学歴は関係がなく、力本位の世界である。実力を示せば、それなりの報酬を受けとるのは、自由主義社会の原則である。(以下省略)という内容だった。そして、この考え方が基本となって、Ｊリーグの誕生へとつながっていった。本県からも、多数のＪリーガーが誕生している。日本のサッカーをリードするメンバーの一人である彼は、千葉高の育んだ、出藍の誉れ高き男であり、千葉県の産んだ、サッカー界最大の巨星である。

時代は、昭和から平成へと変っていった。多様な選手やチーム、サッカー観や価値観の変化、社会情勢の変化や時代の要請に対応するため、協会の規約を現行のものに改正した。

そして、最近の10年間、日本のサッカーは、大きなうねりとなり、全国を席捲していった。その最たるものが、Ｊリーグの誕生だった。平成５年５月15日のことである。その渦中にあって、千葉県のサッカーも大きく変つた。ジェフ市原、続いて柏レイソルがＪリーグの一翼を担うことになった。この両チームの存在が、様々な形で、県サッカー界に大きな影響を与えている。そして、この10年間、本協会の発展ぶりは目覚ましく、各チームの活躍状況は、別項に記載のとおりである。その主なものをあげると、61年の古河千葉の全国社会人大会の優勝、62、63年の市立船橋の全国高校総体の連覇、順大の全国大学選手権の連覇、平成２年の国体少年や日興證券の全国制覇もあった。しかし、特筆されるのは、平成７年、正月の市立船橋の全国選手権優勝に端を発し、７年度の県代表各チームが、それぞれの種別の全国大会を制覇したことである。柏レイソルユース（４種）、高洲一中（３種）、習志野（２種）、そして国体の少年と本県サッカー史上、空前の快挙を成し遂げた。新サッカー王国と喧伝されたものである。８年度も、順大、日興證券が全国を制し、９年正月も、全国高校選手権で、市立船橋が２回目の優勝を飾っている。このように、千葉県の代表チームは、全国レベルでも、強豪、優勝候補と目されるようになってきている。

また、指導者、審判員の更なる充実を図るため、外国での研修も実施している。毎回、10数名であるが、参加者の意欲で、大きな成果をあげている。

一方、本協会は、８年度より事務所を設置し、事務局員も配置している。膨大な事務量に対応するためである。それを支えているのが、加盟チームでありメンバーである。

平成８年度の登録は、次のとおりである。

１種	197チーム	4,700名
２種	179チーム	8,250名
３種	347チーム	16,990名
４種	239チーム	12,870名
女子	35チーム	700名
合計約1,000チーム		約43,500名

なお、８年度予算は、１億６千万円を超え、一昔前に比べると、格段の増大ぶりである。

平成９年３月１日、本協会は、創立50周年記念式典を行った。挨拶、祝辞の後、50年のあゆみを報告し、功労者表彰、感謝状贈呈等が次第だった。その後の祝賀会は、400人を超える参加者で、盛大なものであった。そこには、サッカーを愛する者たちの、回顧と展望の輪が拡がり、サッカーに対する情熱のほとばしりがあった。また、８年度に、全国制覇した、市立船橋、日興證券の祝賀会も兼ねてのパーティでもあり、錦上さらに花をそえるものとなった。

(7)　今後の取組み

平成８年12月25日、2002年ワールドカップ国内開催地の決定で、千葉県ははずれることとなった。しかし、このことで千葉県のサッカーは、くじけることはない。今まで以上の健在を、内外にアピールしなければならない。そのために、今後、次の３点を目標に取組む必要がある。

①ツインタワーのより一層の活性化

②各代表チームの全国的大会における優勝

③法人化を目指した協会組織の強化

しかし、これらを達成するのは、容易なことではない。今、Ｊリーグ人気にかげりがみえると言われている。また、県外の各チームも強化に明け暮れている。更に、法人化のための資金の蓄積は、至難のわざである。

しかし、これらの難問を克服し、解決することが、真のサッカー王国建設への道である。ローマは一日にして成らず、である。毎日の、関係者の、たゆまぬ努力が求められるのである。

功労賞受賞者

①　30周年

吉岡　越治　高橋　荘介　田中　純二
鈴木　貞一　白井与三郎　本間　隆次

②　40周年

角田　富雄　岩崎　勇　松木　裕康
西堂　就　松戸　惇　志村　忠広
長野　靖　山本　忠雄　穂高　良治
神明　民雄　薦田　義文　若菜　征人
浪越　信夫　酒井　稔

③　50周年

青山　克　浅野　興治　砂金　伸
伊藤　剛　今泉　勇幸　大野　俊三
大部　由美　加藤　欣一　加藤　雅雄
木之本興三　木村不二男　木村　雅之
久保田洋一　黒沢　勝生　児島　憲一
斉藤　和夫　酒井　直樹　酒井　充
佐々木竹男　佐々木雅尚　佐藤　時昭
佐藤　宏樹　鹿野　房雄　白井　栄一
鈴木　保　鈴木　政江　鈴木　良平
清宮　利行　竹内　信正　高宮　弘
田中　彰　田辺　暁男　塚田　和敏
椽尾　健次　友澤　国憲　中川　真
名塚　善寛　名良橋　晃　布　啓一郎
野口　幸二　花井　進　林田　芳秋
福田　寛　堀口　幸治　本田裕一郎
前嶋　靖英　松崎　康弘　村井　一俊
元井　康夫　本吉　喜八　山木　里恵

感謝状贈呈者

①　40周年

千葉テレビ放送㈱　千葉日報社
㈱千葉そごう　㈱阿佐商会
内山　忠　川口旅館
篠原　旅館　だいご旅館

リバーサイドホテル　始関

②　50周年

千葉県総合運動場　鴨川市陸上競技場
青葉の森スポーツプラザ
市原緑地運動公園臨海競技場
習志野市秋津サッカー場
成田市中台運動公園陸上競技場
日立柏サッカー場　富津臨海陸上競技場
船橋運動公園陸上競技場
松戸運動公園陸上競技場
NTT移動通信網㈱千葉支店
㈱エイ・エフ・エイ
㈱ソニー・クリエイティブプロダクツ
㈱千葉銀行　カルビー㈱
式田建設工業㈱　㈱渋沢
積水化学工業㈱ 千葉ハイム営業所
ちばぎんJCBカード㈱
ちばぎんDCカード㈱
千葉ゼロックス㈱　東五建設㈱
利根コカ・コーラボトリング㈱
日本電信電話㈱NTT千葉支店
野村不動産㈱　ミズノ㈱

②　組　　織

(1)　歴代会長・副会長・理事長

年度	会　長	副　会　長	理事長
昭 21・22	岩津　俊衛		吉岡　越治
23・24	岩津　俊衛		吉岡　越治
25・26	岩津　俊衛		吉岡　越治
27・28	岩津　俊衛		吉岡　越治
29・30	岩津　俊衛		吉岡　越治
31・32	岩津　俊衛		吉岡　越治
33・34	岩津　俊衛		吉岡　越治
35・36	岩津　俊衛	稲生　八郎	吉岡　越治
37 38	岩津　俊衛	白井与三郎 吉岡　越治	吉岡　越治 畑山　明
39・40	浜田　幸一	白井与三郎、吉岡　越治	畑山　明
41・42	鈴木　貞一	白井与三郎、本間　隆次	田中　純二
43・44	鈴木　貞一	白井与三郎、本間　隆次	田中　純二
45・46	鈴木　貞一	白井与三郎、本間　隆次	田中　純二
47・48	鈴木　貞一	白井与三郎、本間　隆次	畑山　明
49・50	鈴木　貞一	白井与三郎、本間　隆次	畑山　明
51・52	鈴木　貞一 倉田　寛之	白井与三郎、本間　隆次 角田　富雄	畑山　明
53・54	倉田　寛之	角田　富雄	畑山　明
55・56	倉田　寛之	角田　富雄、酒井　稔	畑山　明
57・58	倉田　寛之	角田　富雄、酒井　稔	畑山　明
59・60	倉田　寛之	角田　富雄、田中　彰	畑山　明
61・62	倉田　寛之	田中　彰、佐藤　時昭	畑山　明
63	倉田　寛之	田中　彰、佐藤　時昭	畑山　明
平　1・2	倉田　寛之	田中　彰、佐藤　時昭 加藤　雅雄、畑山　明	鍋島　和夫
3・4	倉田　寛之	田中、佐藤、加藤 畑山、鍋島　和夫	梶原由紀夫
5・6	倉田　寛之	畑山、鍋島、長野　靖 青木　克己、勝又　基夫 千葉　滋胤、安田　敬一	梶原由紀夫
7・8	倉田　寛之	畑山、鍋島、長野 青木、勝又、千葉 安田	梶原由紀夫

(2)　現　役　員

会　長　倉田　寛之
副会長　畑山　彰　鍋島　和夫
長野　靖　青木　克己
千葉　滋胤　勝又　基夫
安田　敬一
相談役　小出善三郎　本多　晃
柏樹　隆　岡　健太郎
顧　問　田中　彰　佐藤　時昭
加藤　雅雄
参　与　高橋　荘介　西堂　就
本之本興三
理事長　梶原由紀夫
副理事長　大野　辰己
理　事
１種委員会　久能　幸二　塙　臣一
２種委員会　福永　広幸
３種委員会　鈴木　雄二
４種委員会　稲田　時男
５種委員会　山田　勢二
フットサル委員会　秋田　信也

技術委員会　藤原　明夫
審判委員会　東　美紀夫
総務委員会　川崎　浩祐
広報委員会　川崎　浩祐（前出）
規律委員会　青木　克己（前出）
財務委員会　大野　辰己（前出）
普及委員会　斉藤　修司
地区委員会　畑山　明（前出）
医事委員会　森川　嗣夫
会長推薦　佐久間隆義　中村　三男
野口　英雄　中川　政春
松戸　敏雄　今関　治男
斉藤　定雄　祖母井秀隆
本間　進　久米　一正
監　事　志村　忠広　浪越　信夫
事務局　中西聡太　足立　和実
〔所在地〕〒264-0036　千葉市若葉区殿台町90―１　式田ビル１階
電話 043(253)7878　FAX 043(253)7838

③　主な大会の成績等
（最近10年間の全国大会記録）

○　昭和62年度
古河千葉
第23回全国社会人サッカー選手権大会　準優勝
順天堂大学
第11回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント　優勝
第36回全日本大学サッカー選手権大会　優勝
市立船橋高校
昭和62年度全国高等学校総合体育大会　優勝
第66回全国高等学校サッカー選手権大会　３位

○　昭和63年度
順天堂大学
第37回全日本大学サッカー選手権大会　優勝
市立船橋高校
昭和63年度全国高等学校総合体育大会　優勝
第67回全国高等学校サッカー選手権大会　準優勝

○　平成元年度
千葉北FC
第14回全日本少年サッカー大会　３位
FC習志野
第１回全国ママさんサッカー大会準優勝

○　平成２年度
千葉選抜（少年）
第45回国民体育大会　優勝
習志野高校
高円宮杯第１回全日本ユースサッカー選手権大会　準優勝
日興證券
第12回全日本女子サッカー選手権大会　優勝

○　平成３年度
東日本JR古河
第２回コニカカップ　３位
市立船橋高校
平成３年度全国高等学校総合体育大会　３位
第70回全国高等学校サッカー選手権大会　３位
市川カネヅカ
第15回全日本クラブユースサッカー選手権大会　３位
千葉選抜（少年）
第46回国民体育大会　準優勝
千葉北FC
第15回全日本少年サッカー大会　３位

○　平成４年度
千葉教員

第13回全国教員サッカー選手権大会　３位
市立船橋高校
平成４年度全国高等学校総合体育大会　準優勝
習志野高校
第71回全国高等学校サッカー選手権大会　３位
市川カネヅカ
第７回全日本クラブジュニアユースサッカー選手権大会　３位
市川FC
第16回全日本少年サッカー大会　３位
日興證券
第４回日本女子サッカーリーグ　３位
第14回全日本女子サッカー選手権大会　優勝

○　平成５年度
順天堂大学
第17回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント　優勝
千葉教員
第14回全国教員サッカー選手権大会　優勝
東国分中学校
第24回全国中学校サッカー大会　３位
ジェフ市原Jrユース
第８回全日本クラブジュニアユースサッカー選手権大会　準優勝
日興證券
第５回日本女子サッカーリーグ前期　２位

○　平成６年度
順天堂大学
第18回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント　３位
国際武道大学
第18回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント　３位
千葉教員
第15回全国教員サッカー選手権大会　優勝
市立船橋高校
第73回全国高等学校サッカー選手権大会　優勝
習志野高校
高円宮杯第５回全日本ユースサッカー選手権大会　３位
ジェフ市原Jrユース
第９回全日本クラブジュニアユースサッカー選手権大会　準優勝
日興證券
第16回全日本女子サッカー選手権大会　準優勝

○　平成７年度
千葉教員
第16回全国教員サッカー選手権大会　優勝
市原スポーツクラブ
トヨタチャレンジカップ'95　３位
習志野高校
平成７年度全国高等学校総合体育大会　優勝
市立船橋高校
高円宮杯第６回全日本ユースサッカー選手権大会　３位
千葉選抜（少年）
第50回国民体育大会　優勝
高洲第一中学校
第26回全国中学校サッカー大会　優勝
ジェフ市原Jrユース
第10回全日本クラブジュニアユースサッカー選手権大会　３位
高円宮杯第７回全日本ジュニアユースサッカー選手権　準優勝
柏レイソルユース
第19回全日本少年サッカー大会　優勝
日興證券